



Alt-Focus GRAPH

十人十色のフォトストーリー

2015年9月 第6号

ステキ写真の秘密にせまる！

あの受講生に会いたい

取材・撮影を担当するのも受講生。毎号、多くの受講生の中からおひとりずつ、ご自身の楽しい写真ライフについてお話をうかがいます。

Vol.6 御代田 雅邦さん

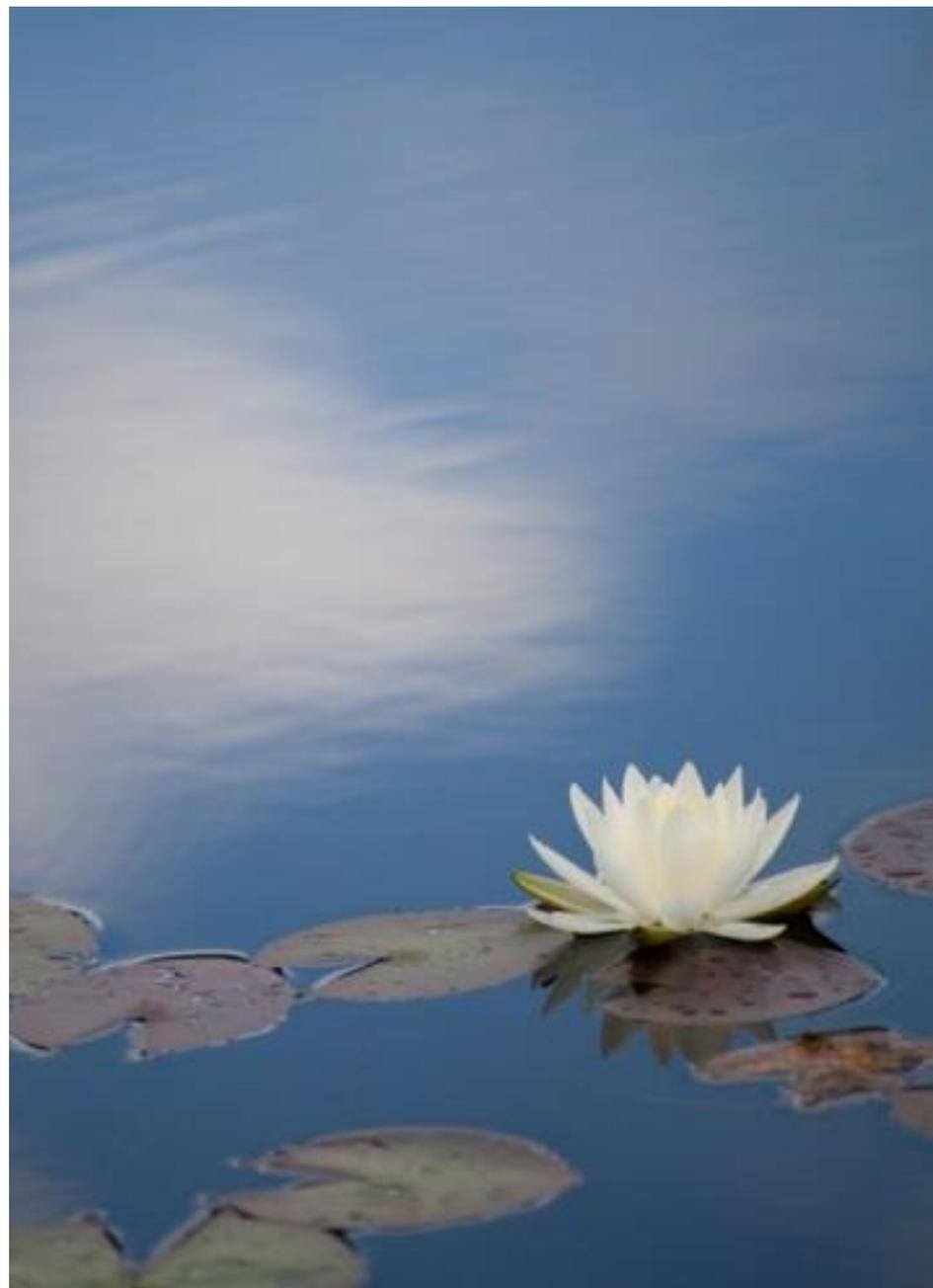
「あの睡蓮の写真を出したい」 初参加を決めた1枚に

アルトフォーカスの講座や実習、懇親会などに多く参加されている御代田さん、受講生作品展は今年（2015年）が初参加とは意外な事実！

「受講生作品展の参加は初めてですが、毎年見にきていました。今回参加しようと思ったのは、気に入った写真が撮れて、それが受講生作品展の募集と重なり、いい機会だしと思ったから…」

静寂の中の睡蓮も、水面の表情もとても素敵。たしかに自分も初めての作品展では「これを出したい」という1枚があったと思い出す。

「これは写真仲間と行った志賀高原の一沼で撮ったものです。睡蓮とトンボを撮ろうと構えていたのですが…。当時小雨が降っていて空も曇っていたところ、急にパッと晴れて水面に青空が映ったんです」



「青空に浮かぶ」 受講生作品展初参加のきっかけになった1枚。



「妖精がいっぱい」新潟・長岡の花火大会にて。写真仲間と参加したツアーで撮った1枚。

全て自分たちでやる姿勢、会場での過ごし方が新鮮

「アルトフォーカス受講生作品展は、出品者が搬入や搬出まで関わっていて、会期中に受付当番で来た受講生同士が、お互いの作品を見て語り合う機会がたくさんある。出品者の皆さんが、何度も作品を見られているのが印象的でした」

実はアルトフォーカス以外では出品経験がなかったが、作品を選んだ後のプリントから額装はお任せだったとのこと。過ごし方や姿勢の違いも「自分たちで全部やるからこそでしょうね」と、今回の初参加を振り返られた。

「来年もぜひ参加したいです。まだキメの1枚がないのですが（笑）」

単身赴任先で作品づくりに開眼！

航空関係のお仕事につき、独身時代は海外へ旅に出ることは写真を撮ったり、お子さんが生まれてからは子どもの写真を撮ったりと、写真歴が長い御代田さんだが、「記録用として撮影をしていて、作品を作るという発想はなかった」とのこと。

「20～30代の頃は、旅の記念や、子供の成長記録として写真を撮ることも多かったのですが、40代頃になるとあまり撮ることもなかったんですね。（次なる写真の転機は）広島に単身赴任をした頃でしょうか。暇を見つけては、職場の近くを散策しながら、山の自然や咲く花を撮影したりしていました。当時、デジタルカメラの性能がどんどんよくなってきて、気がつけばいつもカメラを持ち歩くようになったんです」

リタイア後に楽しみたいと思った

「その後、一眼レフを使うようになってからは、表現の幅も広がってきました。花を撮るときにきれいに背景をぼかしたりとか。もともと美術や映像を見るのが好きでしたが、不器用なものですから自分で描いたりするのはちょっと…。写真ならカメラが表現してくれる。カメラは長く触ってはいましたが、デジタル一眼レフを購入したのは60代初め。リタイアした後にいろいろ楽しむのいいなと思って、アルトフォーカスの講座を受けようと思ったんです」

写真仲間と月1回は撮影に

写真の楽しみかたは人それぞれで、一人で撮影に行く人もいれば、仲間と行く人もいます。コンテストの入賞を目指す人もいれば、人とシェアして楽しむことに充実感をもつ人もいます。

「いくつかの写真サークルに入っていたり、仕事場で写真が趣味の仲間がいたり、月に1回は一緒に撮影をしに行きます。一人で撮影することはあまりないですね」



今年に入ってからには都内、小湊鐵道や信州の桜やツツジ、高幡不動のあじさいなどを撮影し、お祭りなどに誘われて出かけたりされたとか。仲間がいると、自分ひとりでは行かないような場所へ行き、刺激を受けて興味の幅も広がりそうだ。

行った先で、一緒にする仲間と楽しめるもの—それが写真

「コンテストで賞を撮りたいとか、一人でもくもくと撮影して技術を磨いて・・・というよりは、小さな自己



「倫敦？否 横浜」 横浜の街歩きで撮られたスナップ。

満足の積み重ねでしょうか（笑）。仕事でキャリアカウンセリングの業務をしていたことがあります。会社を辞めた後にどういう過ごし方をすると有意義な人生が送れるのか、私自身も話を聞いたり勉強したりしました。その中で印象に残ったのが、『行きたい場所があって、行った先で、一緒にする仲間がいて、やりたいことがあることが大事』という言葉でした。行った先で仲間と写真を撮って、写真を介して付き合いが広がったりすることが楽しい。撮影会といっても、撮影している時間よりその後の飲み会が楽しみなこともあります（笑）」

ほろ酔いでの写真談義もまた、この仲間と撮影に行きたい！という気持ちになりそうだ。

孫の写真を撮るのが夢・・・

今年の作品展のもう1つの作品は、トルコ・カッパドキアで撮影されたもの。他にを見せていただいたのは、横浜の街角スナップや花火、向日葵畑の子どもたちなど、御代田さんの被写体は多彩で自由。以前、私もハワイで撮影された花の写真を拝見させていただいた。さて、これから撮ってみたい写真は？とうかがうと、

「とくにこういうジャンルとか突き詰めて考えたことはないんですが・・・孫の写真を撮りたいですね。その前に子どもの結婚が先ですが（笑）。先日も姪っ子の子どもに会いまして、人懐っこくてかわいいなあって思ったんですよね。やっぱり孫を撮りたいなあって気持ちになります（笑）」

晴れて「おじいちゃん」になったら、ぜひ作品展でお孫さんをお披露目してください！

Profile Masakuni Miyota



写真家・秋野深の講演会で秋野先生の活動に興味を持ち、アルトフォーカスを知る。以降、座学講座の他、撮影実習などに参加を重ねている。写真との付き合いは長く、小学生の頃から。お父様から譲り受けたブローニータイプのカメラで修学旅行にも出かけたとか！現在も自然風景からお祭り、人物、街のスナップなど、様々な被写体に挑戦されている。

御代田さんへのメッセージ

「iPhone はこれで4代目です」と、カメラだけでなく、デジタル全般に明るい御代田さん。インタビュー時もiPad のギャラリーで姪っ子さんのお子さんの写真や、最近撮られた写真などをスマートに見せてくださいました。これからもデジタルのアルバムがますます充実されていくのでしょうか。そして「撮影2時間、その後の飲みが3時間」という言葉にグッと親近感を覚えてしまった私です（笑）。

取材・文＝山本玲子 撮影＝岸田恵利子

季節のノート

～なかくぼくにこのフォト&ショートエッセイ Vol.2～



今を感じて

馴染みのカフェで、ミニコンサートが催される。
大きな体と、穏やかで優しい瞳を持つ青年は
ニューヨーク帰りのジャズ・ミュージシャンだ。
自身のつらい想いから立ち直りつつある彼が
好んで歌う曲が、“Dock Of The Bay”
今は亡き、オーティス・レディングの名曲だ。

♪ 港に出入りする船を眺めて過ごすのさ
日がな一日、ただ、何もせずに ♪

不確かなものがあふれている時代。
大切な、心動かされる言葉に出会えることなど
沢山はないとわかっているのに
テレビ、ラジオ、スマホ、パソコン、、、。
さまざまなモノに囲まれ
いつも何かに反応し、
何かに向かい、そして何かに追われている自分がある。
今を感じて、ただそこに在る。
夏の終わりの一夜、そんなひとときを過ごしたいと思う。

写真・文 = なかくぼくにこ

2008年よりアルトフォーカスに参加。芸術的あるいは創造的な視点を大切にしながら、最近はポートレート撮影にも取り組む。野外撮影の主なフィールドは八ヶ岳南麓。

桂川融己のミャンマー便り

ミンガラバー！ from Yangon

※ ミンガラバー=ミャンマー語の「こんにちは」

連載第4回 ミャンマー交通事情 ～バス・バイク編～

ミンガラバー、ミャンマーのヤンゴン在住の桂川です。
今回はミャンマーの交通事情についてお届けします。

ミャンマーではとにかく渋滞が日常茶飯事。
早朝であれば、20分で行ける空港まで1時間45分かかった
ことも。

渋滞の原因は、大量のタクシーと酷い交通マナー。
路上駐車は当たり前、そもそも駐車場という概念がない上
に、取り締まる人もいないため、諦めざるを得ません。

市民の足はもっぱら「バス」。
エリアやバスのサイズにより若干異なりますが、現地通貨
で200チャット（約20円）でバスへの乗車が可能です。
タクシーの初乗りが1,500チャット（約150円）のため、
やはりバスがお手頃です。
バスの車掌さんはミャンマー語オンリーが多いので、観光
客が乗車するには、少しハードルが高いかもしれません。

どこに乗るの？というほど混みあう乗り合いバス。
とにかく強引に乗り込んできます(笑)。





料金所を通る乗り合いバス。



従業員が制服で乗り込みます。同じ制服を着た人たちが乗るのは通勤用の車。福利厚生のひとつ。



尼さんも乗り合いバスに乗ります。



ヤンゴン市内で活躍しているのは、日本の中古バス達。何年前のバス？といったバスがそこら中を走っています。
このバスは、私の田舎を走っていた濃飛バス！（美濃・飛騨の「濃飛」です）
こうした思わぬ再会は嬉しいものです。

乗り合いバス。乗る前と乗った後の乗り合いバス。
巡礼地ゴールデンロックで知られる名所チャイティーヨへ向かう途中に乗り込んだバスの座席ですが、座席というよりは、棒。
棒に座って、きつきつに詰めて、目的地まではジェットコースター気分でした(笑)。



私が住むミャンマーの中心都市ヤンゴンでは、東南アジアの風物詩(?)ともいえる、大量のバイクが行き交う光景を見かけることはまずありません。

というのも、ヤンゴン市内では、バイクの乗り入れが禁止されているのです。過去に軍の幹部がバイクに乗った者に背後から狙われ、それ以来市内へのバイクの乗り入れが禁止になったとか…。写真(下)のバイク渋滞は、マンダレーという第2の都市。バイクの有無で街の印象もガラッと変わります。



マンダレーにはヤンゴンのようなバイク規制はなく、街中の交差点や踏み切りではバイクが並びます。ベトナムに比べると少ないですが、それでも圧巻の光景。



大学にもこうしてバイクが並んでいます。



バイクに3人乗りは基本。



燃料販売所。ペットボトルに入った赤い液体がガソリン。ガソリンスタンドではなく、民家の軒先で売られています。地方ではよく見られる光景。

プロフィール：桂川 融己

1984年2月生まれ。自然豊かな岐阜県下呂市出身。日本生命保険相互会社にて7年9ヶ月の勤務の後、退職し現在はミャンマーに渡り、現地での人材紹介業に従事。渡航直前の



2013年11月、アルトフォーカスの「はじめての一眼レフ」を受講。

ブログ「From Yangon」にて写真や現地の情報を発信中。 <http://melt-myself.com/>

秋野 深 写真展

『水の流れは身のゆくえ』

こんにちは。アルトフォーカス受講生の田口です。教室主宰の秋野深（あきの・じん）先生の個展が平成27年7月13日から8月2日までクラインブルー（ギャラリー&カフェバー、神保町）にて開催されました。アルトフォーカス第6号ではその個展のお話と先生が考える写真の魅力についてお聞きしました。

もし仮に、「水をテーマに写真を撮る」という課題が与えられたとすると、滝や海、噴水、湖面などが思いつくのが一般的だと思います。そこに個人的な何かをプラスさせるとしても、撮影の時間帯だったりシャッタースピードだったりフィルターを使うなどが私にとっては精一杯考えられること。今回、秋野先生は『水の流れは身のゆくえ』というタイトルで近年の集大成を表現していました。実際に鑑賞させてもらった私は、なるほどこういう表現方法もあるのかと感銘を受け、これこそが写真を自分なりに徹底的に考え抜くことの見本であると思ったのです。

写真展の位置づけとは

— 秋野先生はどれくらいの頻度で写真展を開催されているのですか？

秋野 以前は頻繁にやっていたのですが、個展という形では今回3年半振りになります。最近は地方自治体のPRイベントでの展示などが多かったので、かなり久しぶりの個展です。



『消失が生み出すものⅡ』 第7回タシケント国際フォトビエンナーレ招待出品作品

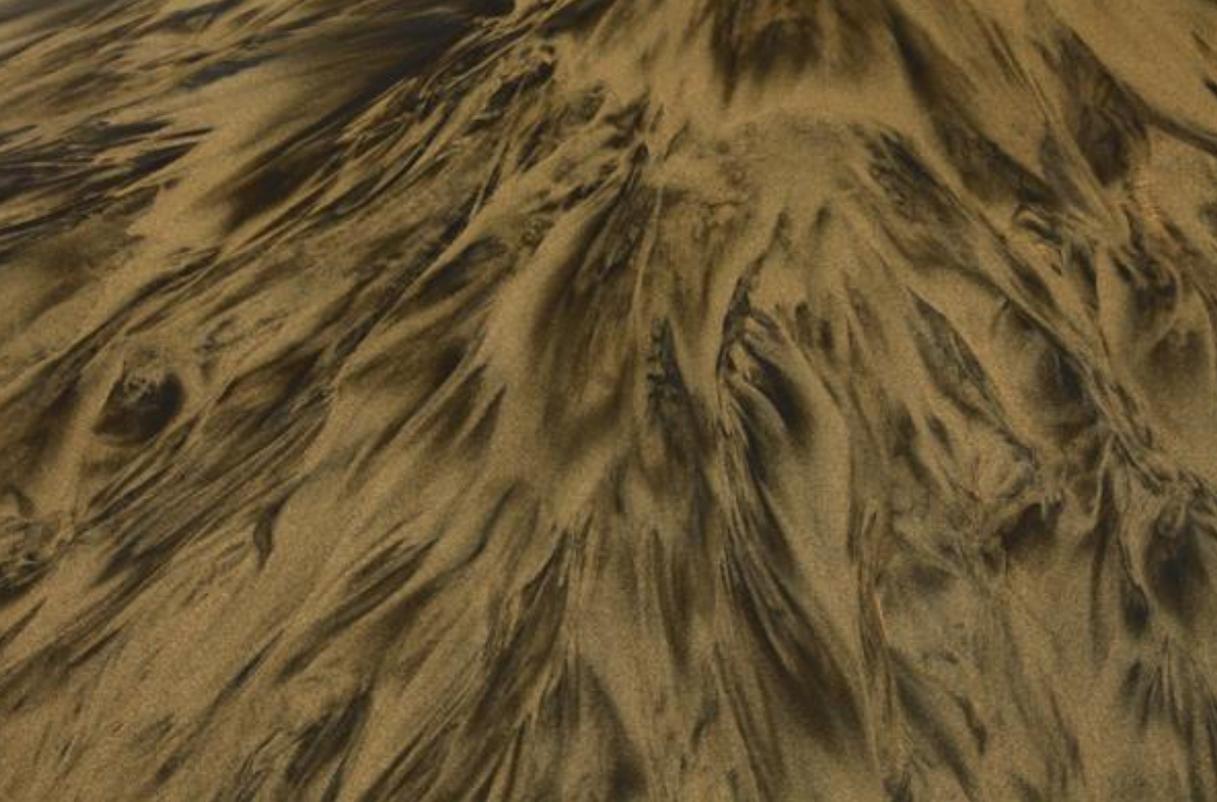
—先生にとって、写真展とはどういう位置づけなのですか？

秋野 写真を写真として見ていただける唯一の機会ですよね。いろんな人に見てもらうだけならウェブサイトでも見てもらえますが、額装して、ひとつの形にして、そのために時間をかける。私の写真を一度も見たことない人、私のことを知らない人が来てくださる。つまり作品の紹介ということが写真展の意味だと思います。自分の中の活動の位置づけとしては、いつ写真展をやろうと決めて、どのテーマでいこうとかこれから先こういう方向性でいこうとかきっかけ（ペースメーカー）になります。もちろんそのテーマで展示をし

たから終わりというわけではなく、方向性を突き詰めたり、やったことのないテーマをやってみたり、今まで撮った写真の中からテーマをくくってみたり。短い意味での集大成でもあります。

—ところで個展のタイトルは、すでに3年前から決めていたのですか？

秋野 いいえ、タイトルまでは決めていませんでした。ただ今までの個展とはがらりと変えたつもりで、こんな感じにしようとは決めていました。前回は鳥海山など地域の魅力を自分の視点でお伝えしていたのですが、こういうくくりでやってみたいなどは



秋野 撮影地はかなりバラバラです。地域の紹介ではないので、写真の説明にあえて撮影地も記載しませんでした。撮影地を記載しなかったのは初めてです。

——【消失が生み出すもの】（前頁）は水を撮影したものの7点で構成されていますが、水の撮影となるともちろん極寒冷地ですよ

秋野 これは厳冬期の栃木県・雲竜溪谷です。このときは自分の撮影風景を動画で初めて撮りました。それを「こんな感じで撮っていますよ」とギャラリートーク（7月18日に開催）で、撮影エピソードの紹介とともに見ていただきました。

——【制約の中の自由】はどんな場所なのでしょう

秋野 鳥海山の湧水が海岸から湧き出す部分です。海岸を流れる水の跡は行く度に形が違いますし、見ている間にも変わっていった二度と同じものは見られません。しかし自然現象には必ずルールがあって、例えば水は必ず低い方へ流れていきます。水も砂も自由に模様を描いているようですが、それは厳密なルールの中の動きなんですね。それが、社会というルールのなかでなんとか自由に生きようとする人間と同じような気もするのです。水を見ていると私はよくそんなことを感じることがあります。

——水と人間の営みが同じ？

秋野 同じというより、ただの滝壺もじっと見ていると、ある程度一定のリズムがあるようで一定ではないところが、人間の鼓動とか血流のように思えてくることなのです。自然界の水も血流のように循環していますし。

『制約の中の自由 I』

思っていました。今回は地域というくくりではなく、水がテーマです。最初はもっと広く、水蒸気、雲なども含めて、というのが企画のスタート地点でした。

——今回は20点の作品がありますが、一体どれくらいの枚数の中からこの枚数に絞ったのでしょうか。

秋野 今回はあまり絞る必要がありませんでした。というのも昨年10月にウズベキスタンの国際フォトビエンナーレに招待してもらい、それには『幻想と現実』というテーマがありました。最初に考えていたテーマとビエンナーレのテーマに共通するものもある

と思い、作品選びはそのビエンナーレである程度やっていました。今回の作品の半分くらいはその時と重なっていて、残りは改めて見直して選びなおすという段階があったのです。

水を擬人化すること

——20枚の作品にはそれぞれ次の5つのタイトルがつけられています。【抵抗と共生】【消失が生み出すもの】【制約の中の自由】【葛藤】【鼓動】。タイトルだけでは、とても水を撮影したものとは思えません。20枚の撮影場所はどんなところだったのでしょうか？

形のないものを形に

——写真展のタイトルがちょっと難しいものですが（笑）、来場者にはどういふふうに見てもらえるかといったところでしょうか？

秋野 水の形は一定ではなく、姿や形を変えますよね。渦巻いたり、ぶつかり合ったり、混ざり合ったり、そういうことを人間の心情に置き換えてタイトルをつけました。見方ひとつ、解釈ひとつでいろんなものに置き換えることができると思うのです。写真は形のないものを形にすることができるもので、それが見ている人の新しい気づきや発想に繋がればと思います。

——「水」に何か特別な思いが元々あったのですか？

秋野 よく撮影に行く鳥海山麓は水がとても綺麗なところで、滝や溪流をよく撮っていました。いろんな写真を撮りたいと思って通っていたのに、あるとき自分が明るい時間帯にしか水の写真を撮っていなかったことに気づきました。実はものすごく偏った撮り方しかしていないのに写真のバリエーションを増やそうとしていたんですね。だから暗い時間にも水を撮ろうと思

ったのがきっかけです。水の動きが止まることなく流れているのを見て、人間の血流や呼吸と同じだと思いました。そこから「鼓動」という発想が生まれたのです。

——今回の写真展の中で苦労したことはあるのでしょうか？

秋野 やはり場所探しですね。例えば川のあたりをウロウロ動き回るので、でもこれは苦労ではなく、写真を撮っていて一番楽しい時間でもあります。何時間もウロウロしたのに1枚も撮らないということもよくあります。三脚を立てる、シャッターを切るというのはほんの短い時間で、大半は撮るべきものを探しています。その試行錯誤がまたいいのです。

写真のチカラとは

秋野 写真のひとつの力に、人を立ち止まらせるというものがあると思うのです。写真は映像と違って情報が少ない分、観る側の人々がじっと立ち止まって見て何かを考えることができます。しかもそれぞれのペースで。それは写真だからこそ、考えてもらいたいのだと思います。今後も同じようなテーマでやっていきたいと思っています。

取材・文・撮影：田口裕子

写真展『水の流れば身のゆくえ』の一部写真を Klein Blue のウェブサイトでご覧になることができます。
<http://kleinblue.jp/gallery-2/秋野深-works/>

写真教室アルトフォーカス

写真家・秋野深による個人運営の写真教室です。都内に、主に一眼レフ、ミラーレス一眼ユーザー向けの講座、撮影会などを開催しています。土日または平日夜開催で、テーマ別に1~3回で終了する講座が中心です。

ウェブサイト：<http://www.alt-focus.com>

Facebook：<https://www.facebook.com/altfocusphoto>

お問合せ：alt-focus@alt-focus.com

シニアのための写真教室アルトプリズム

2015年から本格始動したシニアのための写真教室です。平日午前中〜夕方開催で、基礎からゆっくりと進めていきます。

ウェブサイト：<http://www.alt-prism.com>

問合せ：ap@alt-prism.com

秋野 深(Jin Akino)

1970年生まれ。福岡県出身。会社勤務の後、写真家・執筆家に転身。アジアやアメリカの自然風景、建築物、人々の生活や文化、日本の東北地方(鳥海山麓)の自然を撮影。クラブツーリズム海外国内撮影ツアー同行講師、写真講座講師。地方自治体への地域活性化事業への参画など多方面で活動。

JATA世界旅行博2008、JATA旅博 2011(於：東京ビッグサイト)にて講演。

2008年、ウズベキスタンの文化歴史博物館にて「独立17周年記念展示 秋野深写真展」を開催。

2012年、NHK BSプレミアム『極上美の饗宴』の「シリーズ平山郁夫の挑戦(1)執念のシルクロード」にゲストナビゲーターとして出演。

2014年、第7回タシケント国際フォトビエンナーレ(ウズベキスタン)招待作家。

近著『はじめてのイラン紀行 ラーハな時に身をゆだね』をアマゾンKindleより電子出版。

ウェブサイト：<http://www.jinakino.com>

Facebook：<https://www.facebook.com/jinakinophoto>



Alt-Focusからのお知らせ

■第8回受講生作品展の会期決定！

毎年恒例のAlt-Focus最大のイベント、受講生作品展の会期が決定しました。次回は第8回でAlt-Focusの10周年記念にもあたります。

毎回、有志の受講生20数名が参加し、約100点の様々なタイプの作品が並びます。前回からはフォトブックの展示も始めました。第8回もぜひお楽しみに。

写真教室Alt-Focus 10周年記念

第8回受講生作品展

会期：2016年2月3日(水)～7日(日)

会場：目黒区美術館区民ギャラリー

協賛：株式会社ケンコー



第7回作品展の様子

講師・秋野深からのお知らせ

■島根県益田市で景観フィールドワーク講座開催

今年から島根県西部・益田市の景観計画事業に写真家として参画しています。日本一の水質を誇る高津川があり、歴史で有名な津和野や山口の萩も近いところです。7月25日に「益田市景観フィールドワーク講座 第1回飯浦地区」が開催されました。町の景観の特徴や魅力を発見して写真に撮ることで景観への意識を高めていただくことが目的で、第2回は11月に益田市の歴史地区にて開催されます。

■秋田県大館市で写真講座・撮影会を開催

秋田県北部・大館市の地域活性化・移住促進事業に写真家として参画しています。大館市は、あの忠犬ハチ公のふるさとで、比内地鶏でも有名です。6月28日に、「住みよい町、大館」というテーマで、写真講座と撮影会が開催されました。

撮影会は、温泉施設、スポーツ施設、家庭菜園などまさに日常の空間で行いました。後日の講評会では「同じところで撮影していたのに人によって捉え方が全然違うのは面白い」との感想をいただきました。参加者の写真は市が作成する移住促進のためのパンフレットなどに使用される予定です。



■ディノスショッピングサイトで連載中

カタログ通販ディノスのオンラインショッピングサイトにて「写真家・秋野深のやさしい旅のフォトレッスン」を連載中です。カメラの種類を問わず旅行が大好きな方々向けに、旅の様々なシーンを想定したワンポイントレッスンです。

★レッスン22:時には斜めの構図で変化をつけてみよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson22/

★レッスン21:乗り物から見える光景を上手に撮影しよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson21/

★レッスン20:雨の日ならではの魅力的な被写体を見つけよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson20/

Alt-Focus GRAPH 第6号スタッフ

山本玲子 (取材・執筆)

涼しくなってきました。もう「熱射病になるから外に出たくない」という言い訳ができなくなりました。「寒くて外に出る気がしない」の前に、秋の撮影に出かけたいと思います！

岸田恵利子 (撮影)

38°Cの暑さの中での撮影を体験したおかげで、今年の夏は沢山の楽しい思い出写真が撮れました。とてもラッキーでした。

田口裕子 (取材・執筆・撮影)

この夏は尾瀬の山小屋でアルバイトをして過ごしました。カメラは2台持って行きました。撮る時間があまりなかったのが残念ですが、ひと夏のいい思い出になりました。

山田祥子 (レリアウト)

BBQ・ひまわり畑・ホエールウォッチング・ぶどう狩り……。カメラ片手に頑張ってあちこち出かけてみましたが、小学生の夏休み絵日記の様な結果に。選択ミス(笑)？

秋野深 (監修)

東南アジアで活躍する日本の中古バス……。懐かしい思い出があります。ラオスだったか、バス車内のボタンを恐る恐る思い切って押してみると、日本語で「次、とまります」(笑)。

表紙写真：「シルエット・光と影そして・・・」新井真理子
撮影した写真を逆さまにするというアイデアが功を奏した作品。地面の模様と重なる薄い影の描写が秀逸。

Alt-Focus GRAPH 第6号
発行：写真教室Alt-Focus
発行日：2015年9月10日

<http://www.alt-focus.com>
alt-focus@alt-focus.com